

佐那河内村のザトウムシ

クモ類・貝類班 (徳島県博物同好会)

富島 啓次^{*1}

1. はじめに

ザトウムシは真正のクモ類と同様、蛛形綱に属するが、いろいろ違った特徴を持っている。まず、糸腺がなく糸を出さない。頭胸部と腹部が幅広く接していて、くびれていない。非常に長い脚を持つものが多い。第2歩脚が最も長く、その先端は触覚のような働きがある。

乾燥に弱く、湿度の安定した森の中のような生息環境が必要である。小型の種は落ち葉の中に生息するものが多い。県内でも、森の減少から年々ザトウムシの個体数は少なくなっているようである。

2. 佐那河内村で確認されたザトウムシ類

今回の調査で確認できたザトウムシ類を以下のよう報告する。なお、今回の調査中雨量が少なく種類数は少なく、個体数も極めて少数であった。

また、種名については鶴崎 (1993) の日本産野生生物目録を参照した。

OPILIONES ザトウムシ目

Phalangodinae アカザトウムシ科

1. *Proscotolemon sauteri* ROEWER, 1916

コアカザトウムシ

01.7.28.嵯峨峡 01.8.2.大川原

落ち葉の中に生息する体長1.0~1.4mmの小型種である。

2. *Pseudobiantes japonicus* HIRST, 1911

ニホンアカザトウムシ

01.7.25.旭ヶ丸 01.7.28.大川原 01.8.2.嵯峨峡

これも落ち葉の中にすむ小型種であるが、体長は4~5mmである。触肢は捕獲型で爪が良く発達している。

Travuniidae タテヅメザトウムシ科

3. *Yuria Pulcra briggsi* SUZUKI, 1975

アワタテヅメザトウムシ

01.7.28.大川原

同じく落ち葉の中にすむ体長1.2mmにもみまない小型種である。アワの名が付いているが京都や熊本でも発見されている。

Nipponopsalididae ニホンアゴザトウムシ科

4. *Nipponopsalis abei* (SATO & SUZUKI, 1939)

サスマタアゴザトウムシ

01.7.28.大川原

落ち葉や朽ち木、石の下などに生息する。体長2.5mm程度の小型種である。触肢は歩脚のようにむち状であるが、鉗角は体長の倍くらいあり強大である。体色は黒く、ゆっくりと歩行する。

関東以西に広く分布し、県内でも各地に見られるが個体数は少ない。

Caddoidae マメザトウムシ科

5. *Caddo agilis* BANKS, 1892 マメザトウムシ

01.7.28.大川原

体長1.6~2.8mm小型種である。県内では剣山に次いで2か所目の産地である。目が大きく眼丘は頭胸部の大半を占める。体色は暗褐色で一部に銀白色をおびる。雌しか知られていない。

Phalangiidae マザトウムシ科

6. *Oligolophus aspersus* (KARSCH, 1881) トゲザトウムシ

01.7.28.旭ヶ丸

比較的高地にすむ、頭胸部の前縁に三つの棘^{とげ}がある。秋になると背甲が黒化する。

7. *Nelima nigrocoxa* SATO & SUZUKI, 1939

ヒコナミザトウムシ

01.7.26., 01.8.2.嵯峨峡 01.7.28.大川原

山地でごく普通に見られる。マザトウムシ科に属するものは脚の長いものが多いが、この種は特に長い。夏までは腹面が白いが、秋になると黒化し基節から黒くなる。

8. *Nelima satoi* SUZUKI, 1944 サトウザトウムシ

01.7.25.旭ヶ丸

*1 徳島文理高等学校

前種に近い種である。湿度の高い。滝のしぶきのかかるような所にすむ。

9. *Leiobunum japonicum* MULLER, 1914

モエギザトウムシ

01.7.25.旭ケ丸 01.7.26.01.8.2.嵯峨峡

体長は3mm程度と小さいが、脚は長く第2歩脚は8cmをこえる。腹部がうすい緑色であることからこの名がある。

10. *Gagrellula ferruginer* (LOMAN, 1902)

アカサビザトウムシ

01.7.25.旭ケ丸 01.7.26.嵯峨峡 01.7.28.大川原

体色は明るい褐色であるが腹部の背面に黒い帯状の斑紋と鋭い棘を持つ。

11. *Gagrellula* sp. クロザトウムシ

01.7.25.旭ケ丸 01.7.26.徳円寺

01.7.26.01.8.2.嵯峨峡

前種によく似るが、体長、脚長ともやや小型である。全面が黒く、落ち葉の上を歩行する。

12. *Systemocentrus japonicus* HIRST, 1911

ゴホンヤリザトウムシ

01.7.26.嵯峨峡

腹部背面に5本の棘が並んでいるのでこの名がある。徳島を含めて四国産のものは、すべて6本の棘を持つ。

3. おわりに

今回の調査で5科12種が採集できた。佐那河内村は東山溪県立自然公園の一部に当たり、ネイチャーセンターを中心によく整備された自然公園になっている。大川原牧場からのスカイラインから自然観察のできるコースがつくられていて、年齢を問わず快適に観察できる。

佐那河内で気になる種について説明してみたい。*Caddo agilis* マメザトウムシである。この種は県内では、剣山に次いで2か所目の産地である。日本のマメザトウムシ科は3種あり、マメザトウムシは四国、本州、北海道に分布する。ヒメマメザトウムシは九州、四国、本州に分布し、アワマメザトウムシは四国の剣山でのみ生息する。つまり、剣山ではこの3種いずれも観察できる。3種とも小型種であり、発見しにくいのが、頭胸部にある眼丘がんきゅうに大きな目をもつので一度見ると忘れられない形をしている。3種とも雌のみで雄は知られていない。単為生殖をするものと考えられている。また、この3種はいずれも北米にタイプ標本がある。つまり、北米産のものと同一種であり、まさに隔離的に分布していることになる。

つぎに、*Systemocentrus japonicus* ゴホンヤリザ

トウムシは腹部背面に5本の棘が並んでいる。県内産を含めて四国のものはすべて6本の棘を持っている。1934年に和歌山県で6本棘が発見され、ロップンヤリザトウムシ *S. uyemurai* とされた。1981鈴木・鶴崎が、これを単なる地理的変異とし *S. japonicus* にまとめた。九州、本州の西端および、近畿から東北にかけてゴホンヤリが、四国と中国の大半がロップンヤリが分布していることが分かった。ロップンヤリは胸節の背面からも余分の棘がでてくる。

文 献

- Suzuki, S., 1975. The harvestmen of family Travuniidae from Japan (Travunoidea, Opiliones, Arachnida). J. Sci. Hiroshima Univ. (B-1), 26:53-63.
- Suzuki, S., 1976. The harvestmen of family Caddidae in Japan (Opiliones, Palatores, Caddoidea). J. Sci. Hiroshima Univ. (B-1), 26: 261-273.
- Suzuki, S. and Turusaki, N., 1981. Resdescription of *Systemocentrus japonicus* with Special reference to its Two Geographic Forms. Annot. Zool. Japon. 54: 273-283.
- 鈴木正将・富島啓次・矢野静子・鶴崎展巨 (1977) : 遺跡的ザトウムシにおける隔離分布, Acta Arach. 27:121-138.
- 鶴崎展巨 (1993) : 『日本産野生生物目録－本邦産野生動物植物の種の現状－(無脊椎動物編I)』環境庁編, 81-83.